

16  
25  
76

萬葉集古義

八上天

萬葉集古義

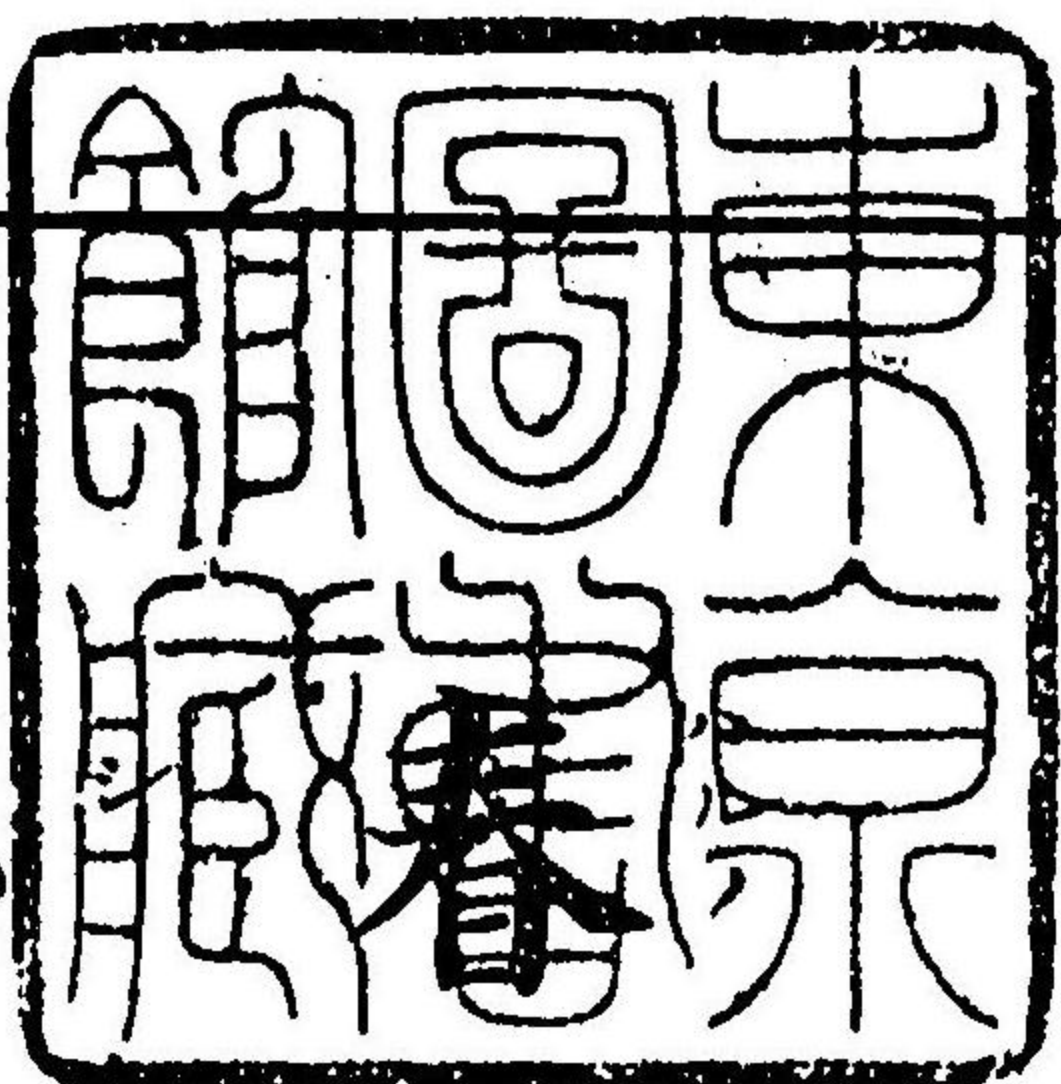
八上天

東泉園書			
冊	九 大 号	三 架	一 六 函

明治十九年九月十一日内務省交付シ

萬葉集古義八卷之上

土佐國 藤原雅澄撰



雜歌

志貴皇子權御歌一首

志貴皇子ハ天智天皇の皇子田原天

皇と謚奉せり御傳一卷下よ委云

イハバシルタルミノウヘノサワラビ

石激垂見之上乃左和良妣乃

毛要出春爾成來鴨。

モ エ ヅル ハル ニ ナリニケル カモ

石激ハ枕詞なり。舊本よ。イハソ。イハソ。七卷。十二。小。石流  
垂水水乎結飲都十二丁に石走垂水之水能などよめ  
り○垂水ハ攝津國豊島郡小あり袖中抄よ。る。みの  
うへのささらびとは攝津と播磨とのさあひよ。る  
と云處あり岸よりえもいとぬ水出る故よ。る。水  
と云あり垂水の明神と申は神おそは。そは。る。と。此  
うへと。ば。る。ミ野といへば其野ふささらびハもえ  
出るなぞとあり垂水明神とハ神名帳小攝津國豊島

郡垂水神社名神大月とある是なり。姓氏録よ。孝元天  
皇御世天下早魁河井涸絶于時阿利真公造作高樋以  
垂水四山基之令通水宮内供奉御膳天皇美其功便賜  
垂水公姓掌垂水神社とも見えたり○左和良妣ハ真  
蕨と云むが如く左ハ美る稱なり左小牡鹿など云  
左よ同じちて萌出るをいふことなりと思ふハあら  
ぬこと○御歌意ハ垂見の野邊の蕨の萌出榮ゆる時  
を得ると如くまことにヨロコバ懽しき時ふ至よける哉とな  
り源氏物語蓬生源氏君の歸京を待思ふ事を云る處ふこしごろあら  
ぬさまなる御さまをのなしういとしきことを思ひ

なごらもとえ出る春よあひ給はなむとねんどわら  
りつれど多ひしごいらなどまでよろこび思ふなる  
御くろああら多まりなどをもよそよのときくべ  
きなり多り云々思合べし契沖云此御歌いなる吉  
事ふ阿をせ給へる時ふよませ給ふといふらねども  
はわらびの根ふおもりてかまりをれるおもえ出  
る春ふなるへまおせよ時よあへるなり天智天皇  
皇子なごら御位よつらせ給はざりしおげも時よお  
もむせられ給ひて事ふあより給ふこともなくて御  
子白壁皇子思ひのけぬ高御座よのぼらせ給ひて光

仁天皇と申奉る皇子も田原天皇の御おくり名を得  
給ひ御子孫今よあひつゞきて御位をつゞせ給ふハ  
此歌よもとめせるなり今うけ給はるもよろこむし  
き御歌なり畧解よ慶雲元年二百戸封せられ和銅七  
年よ二百戸靈龜元年三品よならせ給ふと見ゆれハ  
是等の時此御歌ハ此地をよみ給へるハ封戸攝津な

とふありしハ云々六帖  
御歌をいそぐハ誤れ  
の上のハ載とるハ誤れ

# 鏡女王歌

カミノオホキミノウタ

女王舊本よハ

王女よ誤まり

神奈備乃。伊波瀬乃杜之。喚子

鳥痛莫鳴。吾戀益。

名所因會  
磐瀬社神雨の  
東車瀬村よあ  
りと見ゆ

伊波瀬乃杜ハ大和國平群郡よあり此下ふも二所よ  
よめり按よ集中よ毛利よ杜字を書新撰字鏡よも杜  
毛利又佐加木と見えとりさて此ハ木の土てふ意比  
國字なるべし本居氏玉勝間二よ史記の周本紀贊よ  
所謂周公葬我畢畢在鏹東南杜中註ふ

杜一作社よと泰本紀よ蕩社註よ社一作杜といへり  
こきらハ杜と社とハ字の形の似るよよりてかく  
多むひよ誤れも此狀を相通ふよし有てかゝる  
のも一杜字も社と通ハい毛利小珠よし有又さ  
杜中とあるハ何とかや毛利めきて聞ゆと云りされ  
ど大津杜ハそまでもあらし又谷川士清神代紀通證  
湯津杜木云々杜又訓毛利益神地必植杜樹故指神  
社林叢爲杜也萬葉集訓神社或社字爲毛利亦同とい  
へりいふおむふと娘さあきを神おもものきを母と  
しき説なりカキ作る多むひ多かるよふれも其類と見てこせされり  
さて毛利ハ毛流てふ言の體となりさるふて木の高  
く繁里さる土を云十卷ハ朝旦吾見柳鷺之來居而  
應鳴森爾早奈禮夫木集よ光俊朝臣玉不この道のな  
ナグバキモリニハヤナレとらむとあるハこの十六廿九大野路者繁道森  
卷の歌よよりてよめり

萬葉古義八上

四

徑之氣久登毛云々とよめるふて知るべし。又六卷十  
四丁よ。百木成山者木高之とあるも。成ハ盛の省文ふて  
もるハ繁るハ也よて。森の用語なるを思へし。源氏物  
語蓬生ふがともなくあれもる家此木立志げくもり  
のやうなる成もぎ給云々。うつほ物語俊蔭ふ。人の家  
此はくれる山此やうよて。木立をうしう。所々よ松松  
花の木ども。くご物の木枝せつくしてなき物なく。推  
栗もりをまやしとらむごとくめぐりておひつらな  
まり云々なども見ゆ。さて神社を毛利と云も。神の座  
處ハ必木の繁て有と此なればなるべし。又飯を毛

流といひ。又物など高く積置と毛流といふも。毛流の  
言ハ一なり。○喚子鳥ハいふある鳥なりむ詳ならず。  
なほ品物解ふ云。○痛莫鳴吾戀益とハ。鳴聲の感情を  
催さるゝふつけて。人を戀しく思ふ心のまさるとな  
り。古今集に。時鳥をつ聲きけハあぢきなくぬし。さだ  
まらぬ戀せらるるもとあり。○歌意ハ。石瀬の杜よ居  
喚子鳥よ。志あむあり甚く鳴ことなあれ。汝が音を聞  
ハ感情の催されて。人を戀しくをふこゝろの。いよ  
いよ益る  
そとなり

スルガノウチベガウタヒトツ  
駿河采女歌一首

駿河采女ハ既ク四卷

み出つ傳未詳あらむ

アワユキカハダレニブルトミルマデ  
沫雪香薄太禮爾零登見左右

ニナガラヘチルハナニハナソモ  
二。流倍散波何物之花其毛。

薄太禮ハ離ノ意ふて既ク四卷下二百丁十夜之穂杼呂と  
あるところよ具云りき雪の離々よ散りて降よしなり

○流倍散ハふがれちるの伸まるとなり。切レのさて

かく伸云ハそは緩なる形をさうせよるなりなぐれ

も則ちることなり五卷十五小和何則能爾宇米能波

奈知流比佐可多能阿米欲里由吉能那何列久流加母

十卷五丁小卷向之檜原毛未雲居者子松之末由沫雪

流などあり○何物之花其毛。之字舊本よハな契冲云

梅のちるとい知ながらはむる心よあらばしてとふ

よしによめり今の世の人のいふよもかくのごとく

形るおと多し古今集旋頭歌ふ打わさきをちかゝ人

小物申もわれそのそこよ白くゆけるハふよの花を



もとあり。其毛ハ。問かくる意の詞なり。十卷五十十。我ワが  
 屋戸之田葛葉日殊色付奴不來座君者何情曾毛古今セ丁十。我  
 集よ。色よりも香こそあそれとたもねゆれと。お袖ふ  
 ましやどの梅をもなどあり。又四卷三十十。小小。劔劔太刀身身  
 爾取副常夢見津何如之怪曾毛君爾相為十八六。何何  
 可爾世流布勢能守良曾毛許已太久爾吉民我彌世武武  
 等和禮乎等登牟流などあるも。皆同意なり。○歌意ハ。  
 沫雪の離々離々ふ散てふる歎と見るまでふ。ちらくくと  
 流きてちり來るハ。そも何の花よてあるそ。さても面  
 白のけしきやとなり。初、二句ハ。沫雪此をたれよふる

歎と、いふ意なり

尾張連歌二首

尾張連ハ。傳未詳ならぬ首

の下小。舊本名闕と注せり

春山之開乃乎爲黒爾。春菜採。

妹之白紉見九四與四門。

開乃乎爲黑爾ハ岡部氏乎爲黑ハ手烏里タラリの誤なるべ  
 し。さて開ハ岬サキの意。よて山の岬の多あみたる所。春  
 菜つむとつづくなり。そののちきまみたる道などよ  
 免るを思ふべしと云り。十三十六丁十六高山峯之手折丹  
イメダテ射目立とあるも同じの春菜はハルナとよむべし。も  
 る草をる鳥はる花など云例多し。止由氣宮儀式帳小  
 大神宮司奉進春菜漬料塩二斛と見ゆ。歌意ハ春山  
 此岬の多とみたる處ふ出て春菜をつむ女此衣の白  
 紐を見れば見る事のあらむをさて  
 もなつあしく心よしやとなり

ウチナビクハルキタルラシヤマノマノトホキコヌレノ  
 打靡春來良之。山際遠木末乃。

サキユクミレバ  
 開往見者。

開往はサキユクとよむべし。花の次第は開をいふ。○  
 歌意ハ山間の遠く見るときさる處の花の木ツギの次第  
 は開サキゆくを見れば草木の弱くなよ、  
 の小靡く春よふをけるならしとなり

ナカノモノマラスツカサアベノヒロニハノマツキミノウタヒトツ  
 中納言阿倍廣庭卿歌一首

コ  
ゾノハルイ  
コ  
ジ  
テ  
ウエ  
シ  
ワガヤ  
ド  
去  
年  
春  
伊  
許  
自  
而  
植  
之  
吾  
屋  
外

ノ  
ワカキノ  
ウソ  
ハ  
ハナ  
サキ  
ニ  
ケ  
リ  
之  
若  
樹  
梅  
者  
花  
咲  
爾  
家  
里

イ  
コ  
ジ  
テ  
ウ  
エ  
シ  
伊  
許  
自  
而  
植  
之  
ハ  
伊  
ハ  
そ  
へ  
言  
よ  
て  
許  
自  
ハ  
根  
お  
じ  
よ  
も  
る  
こ  
と  
な  
り  
根  
お  
じ  
ハ  
根  
な  
お  
ら  
ふ  
掘  
取  
る  
こ  
と  
お  
て  
俗  
ふ  
根  
引  
し  
て  
庭  
お  
植  
し  
と  
い  
ふ  
が  
如  
し  
木  
居  
氏  
云  
俗  
語  
ふ  
も  
是  
よ  
り  
そ  
古  
事  
記  
ふ  
天  
香  
山  
之  
五  
百  
津  
真  
賢  
木  
矣  
根  
許  
出  
つ  
ら  
む  
士  
爾  
許  
士  
而  
云  
々  
書  
紀  
よ  
掘  
と  
り  
又  
神  
武  
天  
皇  
卷  
ふ  
拔  
取  
景  
行  
天  
皇  
卷  
よ  
拔  
な  
ど  
も  
見  
ゆ  
古  
語  
拾  
遺  
よ  
古  
語  
佐  
禰

コ  
ジ  
ノ  
子  
コ  
ジ  
居  
自  
能  
禰  
居  
自  
六  
帖  
ふ  
秋  
野  
ハ  
根  
お  
じ  
ふ  
こ  
じ  
て  
持  
去  
と  
も  
巖  
の  
種  
ハ  
遺  
し  
や  
ハ  
せ  
ぬ  
新  
後  
撰  
集  
ふ  
さ  
よ  
こ  
じ  
て  
さ  
の  
木  
よ  
か  
け  
し  
鏡  
お  
そ  
君  
お  
と  
き  
は  
の  
陰  
ハ  
見  
え  
ら  
れ  
現  
存  
六  
帖  
ふ  
を  
る  
の  
ふ  
も  
思  
ひ  
來  
し  
の  
ど  
吾  
や  
ど  
の  
根  
こ  
じ  
此  
梅  
ハ  
花  
咲  
よ  
け  
り  
な  
ど  
あ  
り  
〇  
歌  
意  
か  
く  
れ  
と  
る  
と  
こ  
ろ  
な  
し  
此  
歌  
拾  
遺  
集  
よ  
は  
去  
一  
年  
根  
こ  
じ  
て  
植  
し  
と  
て  
載

ヤ  
マ  
ブ  
ノ  
ス  
ク  
子  
ア  
カ  
ヒ  
ト  
ガ  
ウ  
タ  
ヨ  
ツ  
山  
部  
宿  
禰  
赤  
人  
歌  
四  
首

春野爾。須美禮採爾等。來師吾。  
ハルノヌニスミレツミニトコシアレ  
 曾。野乎奈都可之美。一夜宿二。  
ソヌヲナツカシミヒトヨ子ニ  
 來。  
ケル

須美禮採ハ衣を摺む料。又も花を愛みてもつむな  
 るべし。○野乎奈都可之美ハ野の景色のなつうく  
 面白き故ふれ意なり。○一夜宿二來ハ十九ヒトヨ子ニケル廿四丁よ伊  
 佐左可爾念而來之乎多枯乃浦爾開流藤見而一夜可

經とよめり。○歌意ハ春野ふて衣を摺む料のをみれ  
ベシ  
 を摘取ふとて。かりそ免よ來しと野の景色のなつう  
 しく面白き故よ立歸をぶくして一  
 夜宿をとりにてそ寝よけるをなり  
アシヒキキノヤマサクラバナヒナラベテカ  
 足比奇乃。山櫻花。日並而。如是。  
サキ  
 開有者。甚戀日夜裳。

日並而ハ日を重ねての謂なり。六卷十一よも。茜刺日不  
ヒナズテ  
 並二とよめり。○歌意ハ山櫻花が幾日も日を多く重  
ナクニ

ねてかくのごとく咲てあるならバ、かむらうと甚々戀  
しく思ひむやハ、日を重ねてハ咲に盛と見れば、もや  
變ひ散る故よこそ、かく戀しく思ふな  
れ、さてもなつうしの花盛やとなり

吾勢子爾。令見常念之。梅花其

十方不所見。雪乃零有者。

歌意ハ、開らば吾兄子よ見せむ見せむとかねて思  
入し、梅花の咲ふるふ雪の深くなべて降積みされバ、

其そ花なると分ても知がごとく、かくてハ見をべきよ  
しもなしとなり。古今集序古注よ、梅花それともみえ  
ば久方の天ぎる雪のな  
べてふれ、バとあり

從明日者。春菜將採跡。標之野

爾。昨日毛。今日毛。雪波布利管。

歌意かくれくるやあるなし。六帖よハ、  
春多、ば  
わらぬつまむととて載、新古今集よ  
ハ、明日のらハ若菜つまむと、載り

クサカ ヤマノウタ ヒトツ

# 草香山歌一首

草香山ハ河内國河

内郡なり既く出

忍照難波乎過而打靡草香乃

山乎暮晚爾吾越來者山毛世

爾咲有馬醉木乃不惡君乎何

# 時往而早將見。

忍照ハ難波の枕詞あり既く出つ○打靡ハ草此枕詞

なり草ハ打志なひ靡くものなきバかくつげしり

○山毛世爾は山も狭爾ふて山も狭きまでと云むの

如し俗よ山一杯よあまりて國毛世爾里毛世爾野毛

世爾濱毛世爾道毛世爾などいへる皆其地よ充滿と

謂なりさて此と次なるせ二句ハ不惡をいむ料

よ目ふ觸しるものもて云る章中の序なり○不惡ハ

アシカラヌとよむべしあーびのあーかくぬとつ

くなり。十卷十七よ。春山ハルヤマノ之馬醉アシビノ花之不アシカラヌ惡キミニ。公爾ハシエ波思シエ惠エ  
 也ヤ所ヨセヌ因トモ友好トモヨシと見え。り。○歌意ハ難波を過て。草香山  
 を越來るふ。早日も夕暮よ及び。るふ。未思ふ人の許  
 よハ得至らば。早くそれ愛しき君を。行至て相見む  
 と思ふよ。かくてハいつ。其處ふ至らむ。そとなり。此  
 歌ハ思ふ人のもとへゆくとき。草香山と夕暮よ。ふゆ  
 るとして。やぶて。そこの物もて。序として  
 よめるなり。君とハ思ふ人をさけ。なり  
ミギノ ヒト ウタハ ヨリテ ヨミニ ヒト イヤシキニズ アラハサ ナ ラ

右一首。依作者微不顯名字。

櫻花歌一首并短歌

ヲト 媛ノ 孀ラ 等ガ 之カ。頭ガ 挿シ 乃ノ 多タ 米メ 爾ニ。遊ミヤビ 士ラ  
ノ 蕩カツラ 之ノ 多タ 米メ 等ト。敷シキ 座マセ 流ル。國クニ 乃ノ 波ハ  
タ 多テ 互ニ 爾サキニ。開ケ 爾ル 鷄サクラノ 類ハナ。櫻ノ 花ニ 能ホ 丹ニ 穗ホ  
ヒ 日ハ 波モ 母ア 安ナ 奈ニ 爾ニ。

國乃波多豆は契沖國のまてふてあらゆる國のかぎ  
 りふちくをなをとおひやるなり又志をつ山といふ  
 に四極山とかきこればをていきはみふて大君の志  
 きまは國のあるかぎりと云ころろぬるべしと云  
 但しれもひやるなりと云るハもこしいらば  
 流とあまが親く見て云るやうにいへるなり  
 今案  
 よ國の中央ミチいふまでもなし極ハジメまでもといふ不と  
 のころなるべし○安奈爾アナニ爾字舊本よ何とあるハ  
 本よは歎息の辭あなふやしのあなふと同じ鳴呼ナレさ  
 ても賞怜オモシロやと  
 歎きころなり

反歌

去年之春相有之君爾戀爾手  
 師櫻花者迎來良之母

戀爾手師ハ思ふよ師ハ伎字を草體より誤れるも  
 よてコヒニテキなるべし○迎來良之母はムカヘケ  
 ラシモと訓べし待迎へけるらしの謂なり母ハ歎息  
 辭なり○歌意ハ去年の春花盛の時花見がてらよ逢



てかゝらひし其君よとあれて戀しく思ひてのみ月  
日を経渡りしふ今日又櫻花比下ふてゆくりなく其  
君よあへるハ櫻花が其君を待迎へけるならしきて  
もうれしき事そとなり花の下ふて人よ行逢ふるを  
懽てよめふ  
なるべし

右二首。若宮年魚麻呂誦之。

年魚麻呂ハ

三卷よ出つ

山部宿禰赤人歌一首

百濟野乃。茅古枝爾待春跡。來。

居之鷺鳴爾鷄鷓鴣。

百濟野ハ大和國十市郡あり。既く出舒明天皇紀小  
十一年秋七月詔曰今年造作大宮及大寺則以百濟川  
側爲宮處云々十二月云々是月於百濟川側建九重塔  
十三年冬十月己巳朔丁酉天皇崩于百濟宮丙午殯於

宮北<sup>ニ</sup>是<sup>ヲ</sup>謂<sup>ク</sup>百濟大殞<sup>ス</sup>天武天皇紀云元年六月辛酉朔己丑是日大伴連吹負<sup>リ</sup>繕兵<sup>ヲ</sup>於百濟家<sup>ニ</sup>自南門出<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>と見えたる地の野なるべし○來居之鷺ハ來字舊本よなきハ脱ふること著し故今補ひつ<sup>ヲ</sup>ス<sup>リ</sup>ミ<sup>シ</sup>ウ<sup>グ</sup>ヒ<sup>ス</sup>又<sup>ナ</sup>どよみてハ必<sup>キ</sup>井<sup>シ</sup>ウ<sup>グ</sup>ヒ<sup>ス</sup>とあるべきところなり○歌意かくれるところなし百濟野の春色をおもひやりてよめるなり

オホトモノサカノヘノイラツノガヤナギノウタフタツ

# 大伴坂上郎女柳歌二首

ワガセコガミラムサホヂノアラ  
吾背兒我見良牟佐保道乃青

ヤギヲタラリテダニモミムヨシモガモ  
柳乎手折而谷裳見緑欲得

緑ハ契冲云緑此誤○歌意ハ吾夫子の行て親見給らむ佐保道の青柳を吾ハ太宰府ふありて行て見る事もかかをさればうらやましくのみ思ふことれとど京よありせばもべきやうも有べきとといよく戀しくいのでく手折ふる枝なりとも見ベきよしものがれあれしとねがへるなり

ウチアグル。サホノカハラノアラヤギハイマ  
打上。佐保能河原之。青柳者。今

ハハルヘトナリニケルカモ  
者春部登。成爾鷄類鴨。

打上ハ枕詞なり。ウチアグルと訓べし。舊本よも打上ハ  
いひおこも詞とて。手して物をもることふ多くハそへ  
ていふ詞なり。さて打揚る真帆と云意よ。いひつづけ  
さる。さるべし。此地名。集中。猿帆と帆を揚るといふ  
ハ常此をなす。佐ハ佐衣。佐小牡鹿などの佐よて。真  
といふよ通ふことなり。又はウチノボルとも訓べき

ふや打ハ前の如くいひたこす詞なり。手して物する  
ことより轉じて。さならぬことふもそへいふこと多  
し。ざらバ打登る真穂といふ意よ。いひのけあるなる  
べし。此地名。狹穂とも多登とハ穂の發出る。小隨て。ま  
くもくと立登るよしなり。佐ハ真小通ふよしハ前ふ  
云るが如し。冠辭考よ。佐保道ハ打上とつ。行處なら  
りよ思ひよれる。今者との待々て。其時を正しく  
待得さるよしなり。此までハ。かよへハ春よ至る。なが  
ら。かよへハ。いまだ冬の氣の残りてありしを。待々て  
其。春此節を正しく待得さる今ハといふなり。をべて

今者イマハと連くハ、二方ふことりし事此、一方サマ小決りたる時よいふ詞なり○歌意ハ、佐保川の邊の柳ハ、春の節を正しく待得て、青々と發ハ出て、緑比絲の靡くらむ。今ハ其時節よなりよける哉、さても京方の戀コイく思むる、事そとなり。己上二首ハ、太宰府ふありしほとよめるならむ。此、歌六帖よハ、打比ぶる佐保の川邊比青柳の萌ける春よ成よける哉と載り。又玉葉集よハ、打あさ比佐保比川原比青柳は、今ハまゐるへともえよけるもの、と改免て載られり

大伴宿禰三林梅歌一首

大伴宿禰三依の傳ハ、四卷上よ

委云里林ハ、依の誤なるべし

霜雪毛未過者。不思爾春日里

爾梅花見都。

未過者イマダスギ子バハ、未過ぬふの意なり。既く二卷下よ委云里○不思爾オモハヌニハ、思ひかけもなきふといふ意なり。三卷よ昨

日社公者在然不思爾濱松之上於雲棚引四卷よ不念  
爾妹之咲俤乎夢見而心中二燎管曾呼留五卷よ大船  
乃於毛比多能无爾於毛波奴爾橫風乃云々などある  
皆同じ○歌意ハ霜雪のふる節も未過行を猶寒々く  
あれハ思ひかけもなきふ春日の里よて梅花  
此早開出さるを見つるが急づらしとなり  
アツ ミノ オホキミノウタ ヒトツ

# 厚見王歌一首

厚見王の傳ハ四

卷下よ委云里

河津鳴甘南備河爾陰所見今

哉開良武山振乃花

甘南備河爾云々集中よ高市郡ふも平群郡ふも神名

火をよめり此歌なるハ何郡のよや一説ふ此なるハ  
平群郡なりとも云り○歌意かくれとると

ころなし金葉集よ春深き神なび河よ陰見  
えてうつろひよけそ山吹の花  
オホドモノスク子ムラカミガウソノウタフタツ

# 大伴宿禰村上梅歌二首

大伴宿禰村上ハ續紀ヨ、神護景雲二年七月壬午日向  
國獻白龜、九月辛巳勅、今年七月十一日得肥後國葦北  
郡人刑部廣瀨女日向國宮崎郡人大伴人益所獻白龜、  
赤眼青馬、白髮尾云々、大伴人益刑部廣瀨女並授從八  
位下、賜絶各十匹、綿廿屯、布廿端、正稅一千束云々、又父  
子之際同心、天性恩賞、所被事須同沐、人益父村上者、恕  
以縁黨宜赦入京、寶龜二年四月壬午正六位上大伴宿  
禰村上授從五位下、十一月辛丑爲肥後、三年四月庚  
午從五位上大伴宿禰村  
上爲阿波守と見えたり

含有常。言之梅我枝。今日零四。

沫雪二相而。將開可聞。

含有常ハ、いまだ花不みてありと、いふ意なり。下ハ  
十二月爾者沫雪零跡不知可也、梅花開含有而とあ  
り。此ハ雪ふる時又開出てハ、いふみやまきをさとも  
あらむ。つづみて春節をも待もふさきふるをいひて。  
今の歌とハ、意の表裏なるが如し。○歌意ハ、昨日まで  
いまだ花のほ不みてありと、人のいひしその梅枝ハ、

今朝降し沫雪ふあひ競ひて開出ぬらむあさても美  
しからむを早く見まわしやとなり雪ふあひて咲よ  
し小いふハ下よ今日零之雪爾競而我  
屋前之冬木梅者花開二家里とあり

霞立。春日之里。梅花山下風爾。

落許須莫湯目。

霞立はカスミタツとよむべし。畧解ふカスミタツ。○  
落許須莫湯目ハゆめくちることなわれと云意な

至下ふ官爾毛縦賜有今夜耳將飲酒可毛散許須奈由  
米十一丁よ吾以後所生人如我戀為道相與勿湯目な  
どありなほ集中よありあすなゆえきこになゆめ  
などよめり○歌意ハ春日の里の梅花よゆえくあ  
らしの風よさそられて散失ることなり  
れいつまでもかく賞愛まむそとなり  
大伴宿禰駿河麻呂歌一首

霞立。春日里之。梅花波奈爾將

問常。吾念奈久爾。

波奈爾將問常は、あたよ將問と云が如し。波奈は、集  
 中よ、志らがつく木綿ハ花物。又人ハをな物そなどよ  
 める花物も、をなぐしくあたなる物といへり。こゝ  
 もその花なり。廿卷六丁よ、麻比之都々、伎美我於保世  
 流奈豆之故我波奈乃未等波無伎美奈良奈久爾とあ  
 ると同じの歌意ハ、春日の里に梅花を深く賞愛して  
 問來しよこそあれ、かそそめよあたぐしく思ひて  
 とひ來しよハあらぬことあるを、いふで此花をよそ

よ見えてハ行べきそとなり。或人説よ、波奈爾將問  
 奈波奈爾見年登之安麻乃可波弊奈里爾家良之年緒  
 奈我久とあるよ同じく花の咲る時よ問れむと思ハ  
 ざりしよ、をあらばも花の時よ問來しを歡べるなる  
 べしと云るハ、己ろし、廿卷なるハ、花やうよめづらし  
 く相見むとてと云意なり。元て花よ問、月よ問、など云  
 て、花の咲る時、月の照る時よ訪意とるハ、後、世のこ  
 とよこそあれ、古  
 言よさる云さま  
 なるハ、かつてな  
 きことそらし  
 ナカトミノアソミムラジガウタヒトツ

中臣朝臣武良自歌一首

武良自ハ傳

未詳ならび



トキ ハ イ マ ハ ハ ル ニ ナ リ ス ト ミ エ キ フ ル ト ホ キ  
時者今者。春爾成跡。三雪零。遠

ヤマヘニカスミタナビク  
山邊爾霞多奈婢久。

トキハイマハ 荒木田氏説ふ今者の二字イマと訓例な  
時者今者ハ。伊とてこもトキハイマとよめりされ  
と四卷五四丁小戀者今葉とあると同じ語勢なり。され  
こもトキハイマハ。さて今者とハ待々て正しく其時  
と六言よ訓べし。を待得て春よ至るぬといふ意なり。此上よ委云里○  
歌意ハ今ハ兼て待々し春の時節は既く至るぬると  
て雪のふりよりのしかなと遠き山邊ふのどのふ霞

の立ふれびきてげよもうら  
あなる春のけしきそとなり

カハヘノアソミ アツマ ヒトガウタ ヒトツ  
河邊朝臣東人歌一首

東人ハ續紀よ神護景雲元年正月己巳正六位上川邊  
朝臣東人授從五位下寶龜元年十月辛亥爲石見守と

見え

より

ハル サメ ノ シク シク フル ニ タカ マトノ ヤマ ノ サクラ  
春雨乃敷布零爾高圓山能櫻

者。何如有良武。

歌意ハ春雨の日をかさねて重々降バ草も木も萌  
出て何處も春のけしきになりぬれば高圓山此櫻花  
ハ此頃いふよああるらむ今ハ開出ぬらむと思

ひやらるゝをいふので早く行て見むやとなり

オホトモノスク子ヤカモチがウグヒスノウタヒトツ

### 大伴宿禰家持鸚鳥歌一首

打霧之。雪者零乍。然爲我二。吾

### 宅乃苑爾鸚鳥鳴裳。

打霧之とハ打ハいひおこは詞とて撥といふも同じ  
其ハ多く手して物もることふそいふ詞なり今も  
空は雲霧を手にて打散しとる如くなるをいへり霧  
之ハ霧の伸アとる詞なり伎流とハ雲霧などの立覆  
ひ陰アとるをいふさて此伎流様の絶を緩なるを  
伸て伎良須とも伎良布ともいへり其中ハ伎良須と  
いふハ然令むる方ふいひ伎良布とハ自然了方ふい  
へるふていさゝの差別あることなり此ハ雲霧の空

よ立覆ひ陰らせて。絶ど雪のふる様なり。○歌意ハ。雲霧の空よ立覆ひ陰らせて。絶ど雪ハふりつゝ。なほいと寒くハあれど。さもがふ春の節よ至<sup>ナ</sup>るぬやて。吾家の苑ふ鶯の鳴よ。さても是づらしの聲やとなり。後撰集よ。かきくらし雪ハふりつゝ。あはれがよ。

我家のそのふ鶯をなく。と改めて載しり

オホクラノ スナキ スケ タヂ ヒノ ヤ ヌシノ マ ヒトガ ウタ

# 大藏少輔丹比屋主真人歌

ヒトツ

## 一首

屋主ハ。續紀ふ。神龜元年二月壬子。正六位上多治真人屋主。授從五位下。天平十七年正月乙丑。從五位下多治比。真人屋主。授從五位上。十八年九月己巳。爲備前守。二十年二月己未。授正五位下。天平勝寶元年閏五月甲午朔。爲左大舍人。頭し。あり。既く六卷よ。丹比屋主見え。あり。其ハ屋主ハ。家主の誤なるべきよし。彼處よ云里披見て考べし

ナニハヘニヒトノユケレバオクレ井テ  
難波邊爾。人之行禮波。後居而。

春菜採兒乎。見之悲也。

ハル ナ ツム コ ラ ミル ガ カナシ サ  
人と云るハ、夫なり○歌意ハ、公任ふどふて、攝津國ふ  
別れて夫の行てあれバ、遺<sub>レ</sub>里居てとびく物うさふ  
をーやむを不<sub>レ</sub>く思ひの、もるけむこともあらむの  
とて、志ひて野邊よ出て、若菜を採、其婦を見れば、いと  
不<sub>レ</sub>くあされよて、そのうれしきるとしむ方なしと  
なり、契冲云、せめての心やりよつめバ、おもふことな  
き人の、野遊の興よつむと  
かきりて、あけしきなり

丹比真人乙麻呂歌一首

タゲ ヒノ マ ヒト オト マ ロガ ヲタ ヒト ツ  
乙麻呂ハ、目錄ふ、屋主、真人第二之子也と註せり、續紀  
よ、天平神護元年正月己亥、正六位上多治比真人乙麻  
呂、授從五位下、十月辛未、行幸紀伊國、以云々從五位  
下多治比真人乙麻呂、爲御前次第司次官、と見ゆ

霞立野上乃方爾行之可波。鰺鳥

鳴都春爾成良思。

野上は。又ノ。へ。とよみて。ふい野のことなり。上ハ。高圓  
 の上藤原の上など云上よて。また軽くそへたる言な  
 る。これと心得る説ハ。あろ。二卷四十。小佐美乃  
 山野上乃。宇波疑六卷。十四。ふ。飽津之小野笑野上者。を  
 どあるよ。同じ。○歌意ハ。霞の立野邊の方ふ出て行し  
 ろ。ハ。鶯の鳴初音を聞つるよ。これよて思へ。ハ。實よの  
 どのなる春の節よ至れ  
 るよてあるらしとなり  
 タカタノ。オホキミノ。ウタ。ヒトツ

# 高田女王歌一首

高田女王ハ。四卷よ出つ。舊本こく。ふ。高安之女也。と註  
 せり。高安ハ。高安王のことなるべし。一本よハ。此註な  
 し

ヤマブキノ。サキタル。マヘノ。ツホスミ  
 山振之。咲有野邊乃。都保須美  
 レ。コノ。ハルノ。アソニ。サカリナリケリ  
 禮。此春之雨爾。盛柰里鷄利。

都保須美禮ハ。此下田村家大嬢歌ふも見ゆ。都保ハ。い  
 ろなる意よ。あらむ未詳ならん。含む意よ。てもあら  
 む。榮花物語よ。お

のた此屏風を侍不<sub>レ</sub>つとあるも開<sub>レ</sub>の反あれ<sub>レ</sub>同  
言ならむされど都保須美礼ハ二處まで保字を書れ  
バ保ハ清音なることハあるし契冲お考よをみれの  
花ハ下此方よまろくて<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>ご<sub>レ</sub>とく<sub>レ</sub>なる<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>あれ  
バ壺董とハ云なりと云り壺の保  
も古ハ清て唱へし<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>猶<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>べ  
し ○歌意かくれ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>ろ<sub>レ</sub>なし  
オホ トモノ サカノ ヘノ イラツツガ ウタ ヒトツ

# 大伴坂上郎女歌一首

風交。雪者雖零。實爾不成。吾宅  
之梅乎。花爾令落莫。

譬喻歌なり ○風交云々五卷 廿九 風雜雨布流欲乃  
雨雜雪布流欲波云々十卷 七 風交雪者零乍然爲蟹  
霞田菜引春去爾來 ○歌意ハ多とひ風まじ雪ハふ  
るともまた實<sub>レ</sub>よならぬ吾庭の梅を花のみふてち  
はことなあれとなり初二句ハとひ世間の人ハと  
まどとさまぐふいひしてはわくともと云意を  
とへとり實<sub>レ</sub>爾不成ハまじ實<sub>レ</sub>夫婦となりえぬをい  
ふ花爾令落莫ハ唯風よ言かそし<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>み<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>こ  
となわれの意なるべし下 吾妹子之形見乃合  
歡木者花耳爾咲而蓋實爾不成鴨とよめる類なるべ

し。畧解ふ。花よハ。あたよと云意よて。いま  
だ逢も見ぬ男のうへを。云さわくこと  
なうれと云譬喩歌。又ハ譬よハあらで。  
梅を惜てよめるうといへるハいあじ  
オホトモノスク子ヤカモチガキツシノウタヒトツ

# 大伴宿禰家持春鳩歌一首

春字舊本小養と作るハ

誤なり。今ハ目錄小從つ

春野爾。安佐留鳩乃。妻戀爾。已

我當乎。人爾令知管。

令知管ハ人小知れつゝの意なり。けつてこの管の言よ。  
歎の餘意を含ませしり。○歌意ハ春此野よ食を求る  
雉の己が妻に戀しく思ハるゝ思ひよ堪る由て。聲ふ  
出して。それ隠所を人よそこと知れつゝ。つひよ獵人  
など小獲れむハ。さてもあそれなる事そとなり。按よ。  
此歌も。また雉をよめるふハあらで。深く志此ひて  
あひする女を。思ふ思ひよあまりて。色よ出て人よ志  
られつゝ。親の嘖讓よあそむこせを。悔歎きてよえり  
譬喩歌なるべき。此歌拾遺集よハ。  
たのが何りあを。と改て入られしり

オホ トモノサカノヘノイラツノガウク ヒトツ

# 大伴坂上郎女歌一首

ヨノツ子ニキクハクルシキヨバコトリコエナツ  
尋常。聞者苦寸。喚子鳥。音奈都

カシキトキニハナリヌ  
炊。時庭成奴。

キクハケシキ  
聞者苦寸ハ聞まうきといふ意なり。俗よきともな  
いと云よ同じ○時庭成奴ハ庭とは他時よむあへて  
いふ詞なり。他時よハ然らば今の時節よハといふな  
己奴ハ已成此奴よて時よハ既く成ぬると云○歌意

ハ喚子鳥ハ常ふも鳴ども。他時よハ聞まうくくるし  
き鳥の音なるよ。其音を馴着しくたをーろく聞ま  
しき。春此時節よハ成ぬる也なり。鳥の聲の時よと  
そて面白くもくるしくも聞なざるハ常理なり

右一首。天平四年三  
月一日。佐保宅作。

佐保宅とハ坂上郎女の父大伴安麻呂卿を  
ハ。四巻よ佐保大納言といへれば其家なり

ハルノシタシミウタ

# 春相聞



オホトモノスク子ヤカモチがオケルサカノヘノイヘノ  
大伴宿禰家持贈坂上家之

オホイラツソニウタヒトツ  
大嬢歌一首

坂上家之大嬢ハ大伴宿奈麻呂卿の女にして田村

大嬢比同母妹なりなほ次ふ云べし既サキふも云り

ワガヤドニマキシナデシコイツシカモハナ  
吾屋外爾時之瞿麥何時毛花

ニサキナムナソヘツミム  
爾咲奈武名蘇經乍見武

何時毛イツシカモハ之シといふハ助辭なりこの之シの言ふカあり  
もべて之シの助辭ハそれ下もぢをとるゑていおもく

思ハもる處コにおく辭なり此ハ何時コの定その時を待

遠カよ下もぢよおもく思ふよしなり加ハ歟カよて疑辭

毛モハ歎息の意を含めたる助辭あり○名蘇經ナソヘツミ乍見武

ハ大嬢よなそらへつゝ見むとなり○歌意かくれと

るところなし源氏物語紅葉賀よよそへつゝ見るふ

心ハなぐさまで露けさよゆるなでしこの花ハ花よさ

うなむと思給へしもかひなきせよ侍ればとありと

阿るハ今の歌よよりて書るものなり但し是ハ此歌  
よてハ咲奈武



田村家之大嬢之字舊本ハ毛よ誤ハ大伴宿奈麻呂卿の女小  
 て母ハ坂上郎女なり。卿の田村里よをまれ々々よつ  
 きて居ラれし故小。田村大嬢と呼マ。大嬢と云るハ長女  
 此よしなり。○坂上大嬢ハ母の坂上里よをまれしよ  
 つきて居れしよよりて。坂上大嬢と呼りかくて田村  
 大嬢此同母妹なれば。大嬢と云ることいゝいなれど。  
 坂上家よ居れし女子よてハ第一の女なりけり故  
 よ。長女よなもらへて。大嬢と呼て。其妹を第二女よな  
 もらへて。坂上二嬢オトイラシと呼なせるなるべし。なほこの姉  
 妹の傳ハ三卷下二十同二十四卷上六十等六十注るを

も考合

もべし

チ バナ ヌク アサ ギ ガ ハラ ノ ツ ホ ス ミ  
 茅花拔。淺茅之原乃。都保須美。

レ イマ サカリ ナリ アガ コフラ ク ハ  
 禮。今盛有。吾戀苦波。

茅花はチバナと訓べし。○本句ハ序よて盛サリをいもむ  
 料なり。○今盛有ハ今盛の時よてありといふなり。盛サリ  
 ハ妹を戀しく思ふ心の盛りよ甚しきをいへり。十卷  
 十四丁ふ。吾瀬子爾吾戀良久者。奥山之馬醉花之今盛有。

とあるは同じ○吾戀苦波ハ。吾戀しく思

ふやうハと云意あり○歌意かくれあし

オホトモノスク子ヤカモチガオクレルサカノヘノイラツメニ

# 大伴宿禰家持贈坂上郎女

ウタ ヒトツ

## 歌一首

坂上郎女ハ大伴坂上郎女よて家持卿

の叔母又姑なり傳三卷下よ委注リ

ココロガキモノニソアリケルハルカスミタ

## 情具伎物爾曾有鷄類春霞多

## 奈引時爾戀乃繁者。

ナビクトキニコヒノシゲキハ

情具伎ハ四卷下百一ふ委説至此ハ愛憐しく思ふ心

のいよく深切をいふなるべし。岡部氏神代紀の初

と訓しを合せ思ふよくもること、聞ゆ然きバお

つうなくこゝるもとなきを云なりと云れどい

○歌意ハ春霞立るれびきてけしきうらくあふいと

ねもしらくめでとき時ふ二人居るらびいふふとの

しからむと思ふを郎女ふ離れ居て唯獨戀しく思ふ

心の繁きハいよく愛憐しく思ハる、心のまさり

て深切き物よてそありけるといふなるべし。六帖よ初句を

心うき  
と改め  
ふるハ  
いあ

カサノイラツノガ オクル オホ トモノ ヤカ モチニウタ ヒトツ

# 笠女郎。贈大伴家持歌一首

水鳥之。鴨乃羽色乃。春山乃。於

# 保束無毛。所念可聞。

本二句ハ。春山をいむ料の序なり。廿卷ハ。水鳥乃可  
毛能羽能伊呂乃青馬乎。此下ハ。水鳥乃青羽乃山とモ

よめり○於保束無毛ハ。契沖。鬱の字を。オホツカナキ

とよ免王。鬱の字此心ハ。多とハ。バさうそふえゆる木  
残灰の下よさしいれふるが。はもがふもえ出ねと。下

よふをほるやうに心なり。春山の陽氣下よこちて。や  
やもえ出れと。猶くゆるやうなるを。むねよおもひの

ふさざりふるやうよ。多とへていふなりといへり。十  
卷下。今夜乃於保束無荷。霍公鳥喧奈流聲之音乃。遙

左又。春去者紀之許能暮之夕月夜鬱束無裳山陰爾  
指天。なども見えとり○歌意ハ。君を戀慕ふ心の。育ふ

みちふさざりて。せむ方なくさし。せまりても思ハる

る事哉。さてもく

るしやとなり

キノイラツメガウタヒトツ

# 紀女郎歌一首

紀女郎ハ四卷下よ出つ古本よ鹿人大

夫カ女名ヲ曰小鹿安貴王之妻也と注せり

ヤ ミ ナラバウ ヲ ベ モ キ マ サ ジ ウソノハナ

闇夜有者。宇倍毛不來座。梅花。

サケル ツク ヨ ニ イ デ マ サ ジ ト ヤ

開月夜爾。伊而麻左自常屋。

伊而麻左自常屋ハ而は耐の省文なるべし。此下三十

ふ令觀麻而爾波又三十四相時麻而波十九十九ふ可頭

良久麻而爾なと書り。又而はテの訓ある故に借て

の處に用ひるを思へばさよハありじ。又畧解よ。而

ハ耐の誤歎といへばと。ひがことなり。集中右の如く。

あまの所よ而と書れば誤字はあらむ。いさて伊而

あで省文なることをバねもハざりらむ。いさて伊而

座ハ古事記傳云記中ふ天皇ならびても幸行と多く

書。此語本ハ出た意よ云つるふを有べたれども必

さらでも。まだ行給ふふも來給ふよと云。今の俗語

ふも。御出なざるを云。行ことよも來ことふも用る。 同し意むえなり。天智天皇紀童謡ふ于知波志能都梅

能阿素弭爾伊提麻栖古云々。伊提麻志能俱伊播阿羅  
 珥茹云々とありと云り。土左日記。講師馬の餓しよ  
 いでませり。○歌意ハ。闇此夜ならハ。來まさむとても  
 げよことわりなり。こ此梅の花も咲。月もおもしろく  
 てまつ。あひよひひて興あるよひなるふ。君ハ來  
 まさじとやハ。さりとも今宵ハ。來まほべきことよて  
 あるをとりあり。十卷サ四。吾社葉憎毛有目吾屋前之  
 花橘乎見爾波不來鳥屋語勢似より。又同卷十六に。春  
 雨爾衣甚將通哉。七日四零者七夜不來哉。又サ四。霍公  
 鳥來鳴動岡部有藤浪見者君者不來登夜なども有。

天平五年癸酉春閏三月。笠

朝臣金村贈入唐使歌一首

并短歌

入唐使ハ。續紀ふ。天平四年八月。以從四位下多治比。真  
 人廣成爲遣唐大使。と見え。五卷山上。臣好去好來。  
 歌よつきて注せり。九卷十  
 九卷よも。同時の歌あり

タマ タ スキ カケヌ トキ ナク イキノヲ ニ アガ モフ  
玉手次。不懸時無。氣緒爾。吾念

キミ ハ ウツ セミ ノ ヨノ ヒト ナレバ オホ キミ ノ  
公者。虚蟬之。代。人。有。者。大。王。之。

ミコト カシコミ ユフ サレバ タツ ガ ツマ ヨブ ナニ ハ ガタ  
命恐。夕去者。鶴之妻。喚難波方。

ミ ツノ サキ ヨリ オホ フ子 ニ マ カガ シバ ヌキ シラ  
三津埼。從大船爾。二梶繁貫白

ナミ ノ タカキ アル ミ ヲ シマ ツタヒ イ ワカレ ユカ バ  
浪乃。高荒海乎。島傳伊別往者。

トマレレル アレ ハ ヌサ トリ イハヒ ツ、キミ ヲ マタ  
留有。吾者幣引。齊乍。公乎者將

ム ハヤ カヘリマ セ  
待。早還萬世。

タマタネキ 玉手次ハ、懸をいひむ料比枕詞なり○代人有者大王

ノ 之六の二句、舊本よなきハ脱ふるなり、契沖九卷長歌

ノ 人ト成出やハかゝきを云々虚蟬乃代人有者大王

ノ 之御命恐美まゝ其つゞきの長歌ハ虚蟬乃世人有者

オホキミノ 大王之御命恐彌とありて、亦、もか比例に依ふ二句

脱しなるべしと云るハ、信よいをれあることなりけ



り○島傳ハ、島より島に轉り廻りて漕行を云。七卷、  
島傳足速乃小舟風守年者也。經南相常齒無二十三、  
二、マカチヌキイソノギタミツシマツヒミシドモアカズミヨシヌノタキモトッロニオツルシラ  
二、マカチヌキイソノギタミツシマツヒミシドモアカズミヨシヌノタキモトッロニオツルシラ  
二、マカチヌキイソノギタミツシマツヒミシドモアカズミヨシヌノタキモトッロニオツルシラ  
浪とあり○弊引ハ、岡部氏云、弊引ハ、被カヒハあれど、こ  
の歌よらかなをも引ハ取の誤よて、又サトリ  
なるべし○待字舊本よ往と作るハ誤なり

### 反歌

波上從所見兒島之雲隱穴氣

### 衝之相別去者

兒島ハ、何地よある島とも定めがし。難波より見放  
る海中の島をひろく云ふもあるべし○相別去者  
ハ、アヒワカレナバとよむべし。畧解ハ、イ子バと相別  
とは、おぎゆくふの見えぬなるをいふ詞なり。こぎ  
わりれなむ家のあふりみどとある。こぎあられも見  
えぬなるを云るよて同ト○歌意ハ、今君がこぎゆく  
舟の波此あまひより見ゆる小島此雲隠れとること  
く見えみ見えぬもよるあふなるよつきても名残を

しくて、嗚呼いきづらしや、其船のふつよ見えをなり  
なば又いゝむありふゝかなし加らむとなり。夫木集  
よ、里わ

のむ花咲ぬれば浪  
間より見ゆる兒  
島も雲隠れつゝ  
今の歌よよれり

玉切。命向。戀從者。公之三船乃。

梶柄母我。

玉切ハ、命の枕詞なり。命向ハ、戀しく思ふ心の甚し  
くて、命よ對ふと云。俗言よていゝむ、命を相手よし  
て、戀しく思ふといふが如し。

谷川氏云、明律  
考、舵牙を  
ぢかると譯せ  
り。舵の取木な  
り。堀川百首よ  
ハ、かぢもいら  
とよめり

梶柄母我ハ、梶柄をカヂカラとよむ時ハ、和名抄よ、釈  
名云、笑其體曰、暮夜加良とある。此例よよて、梶の取  
木を、加治加良ともいふべきことなり。可良加治よ、十  
四  
ゆ、といふも、柄楫の義ときこえり。まゝ弓束と云例  
ふよらバ、和名抄よ、釈名云、弓束、曰、彌、加治都加とも  
いふべきも、此なり。又和名抄よ、方言云、刈劍、野王案、祠  
鎌柄也。和名加万都加ともあり。母我ハ、三卷、丁、五、小、伊  
勢海之奥津、白浪花爾欲得、畏而妹之家、畏爲と見え  
集中よ、多き詞なり。冀ふ意なり。○歌意ハ、命よ對ひて、  
甚しく戀しく思ハむよりハ、中々よ人とあらば、て、君

が御舟の梶柄よだふなりて。そひゆのよしものをさ  
らばかゝるくるしき思ひハあるまじきよとなり

フチハラノアツミ ヒロ ツツガ サクラノハナヲ オクレル ヲトツニ  
藤原朝臣廣嗣。櫻花贈娘子

歌一首

廣嗣の傳ハ六卷下よ委云里。

式部卿宇合の第一子あり

此花乃。一與能内爾。百種乃言

曾隱有於保呂可爾爲莫。

一與ハ一辯のことなりと云里。○歌意ハこの折て参

らる。櫻花此一ひらの内よ。君よいもまほしき。百種

此詞が隱里てあるそ。おほ方

の花と見てあるなとなり

娘子和歌一首

此花乃。一與能裏波。百種乃言

持不勝而。所折家良受也。

歌意ハのさまひおこせしごとく。これ給ハる花の一  
ひらの内よ。百種の詞がみをりてあるらむ。そもみ此  
花ハその百種の詞のおもきよもへびして。せられけ  
るふあらずやハとなり。三吉野乃玉松之枝者波思吉  
香聞君之御言乎持而  
加欲波久思合べし

厚見王贈久米女郎歌一首

厚見王ハ四卷下よ出つ。久米女郎ハ傳未詳ならん。  
久米連若賣よてもあるべき。若賣ハ續紀よ。天平十  
一年三月庚申。石上朝臣乙麻呂坐。對久米連若賣。配流  
土左國。若賣配下総國焉。十二年六月庚午。大赦。久米連  
若女召令入京。景雲元年十月甲午。無位久米連若女授  
從五位下。二年十月乙卯。從五位上。寶龜三年正月辛卯。  
正五位上。七年正月丙申。從四位下。十一年六月己未。散  
位。從四位下。久米連若女卒。贈右大臣。從二位藤原朝臣  
百川之母也。  
と見えさり

ヤドニアル。サクラノハナハ。イマモカモマツカゼ。  
屋戸在。櫻花者。今毛香聞。松風  
疾。地爾落良武。

イタミツチニチルラム  
ヤドニアル  
屋戸在ハ。女郎が家庭よあるなり。○今毛香聞ハ。今哉

よて。ニツの毛ハ。歎息の意を含めとる助辭なり。○松風

疾ハ。松風が甚く吹故ふの意なり

○歌意かくれとるところなし

クメノイラツメガコタハマヅルウタヒトツ

久米女郎報贈歌一首

ヨノナカモツチニシアラ子バヤドニ  
世間毛。常爾師不有者。屋戸爾  
有。櫻花乃。不所比日可聞。

アル。サクラノハナノチレル。コロカモ  
不所ハ。契沖云。おれをチレル。とよめるハ。もとの所ふ

あらぬハ。花よてハ。ちるなれば。義を以てかけらなり

○歌意ハ。のよまふ如く。妻が家庭よある櫻花ハ。風が

甚く吹故よ。地よ落てあり。人の世間も常なきならひ

よしあるなれば。其如く。花も多し一盛よて散失ぬる

ハ。さてくくちとしき事哉。これよて思へば。花も一

時我身も一時よて君ふ訪れむも今志むらくの間よ  
て不となく見苦しきと此よあり老をてむとれもへ  
のあまれのなしき世間よて

あらむやのとの下心なり

紀女郎折攀合歡木花并茅

花贈大伴宿禰家持歌二首

合歡木花ハ六月の比開茅花ハ三月の物なれば時異  
なり是ハ藥よせむとめよ春抜て多くをへ置とるを

夏贈きるなるべしと云る○合歡

木花の花字古寫本よハ華と作る

戲奴ワケ變カ云ク之ガ爲タ吾手母須麻爾ニ

春野爾ハルノ枝流茅花曾ヌ御食而肥コエ

座マセ

戲奴ハ人ヲを賤ケしめて云稱ナなり四卷大伴三依歌よ吾  
君者キミハ和氣ワケ乎波死シ常念トオモヘカ可聞モ云々とある歌の下よ具注

せりきさてあゝの本居氏、赤色の家持卿へ贈る歌な  
 れば、賤しめて和氣とはいふべくもあらぬせ。志のい  
 へるは多そふれなり。故に戯奴と書て、多そふきなるこ  
 とを顯はせるなり。戯は奴の如しといや志免て云る  
 意なり。といへるが如し。○自注の變字ハ、反は改むべ  
 て、翻譯を○吾手母須麻爾ハ、此下ふも、手母須麻爾殖  
 之意なり。○シハギニヤカウテハミレドモアカズコソクサム  
 之芽子爾也還者。雖見不飽情將盡とよめり。須麻ハ本  
 居氏數の意ふやと云り。○御食而肥座契冲云、あゝふ  
 めしてこえませといひ返しよ。茅花を喫といやせ  
 ふやれとあれバ、人をあやす功あるよや。本草綱目ふ

白茅根有補中益氣之功。茅針及茅花共無益氣之功。蘓  
 頌曰。俗謂之茅針甚益小兒とあれど、他の醫書ふとふ  
 あることふあそ。○歌意ハ、其方の爲をひとへよれを  
 ひて、他事なく吾手も數は勞きて、春野よてぬける茅  
 花そよ、いあでこれを大切ふねりして、きこしめして  
 肥賜へとなり。十六丁サ三、ふ石麻呂爾吾物申夏瘦爾吉  
 跡云物曾武奈伎  
 取食思合べし

畫者咲。夜者戀宿。合歡木花。君

耳將見哉。和氣佐倍爾見代。

夜者戀宿ハ、夜ひとりぬる人の人をごひしく思ひて  
ぬるよよそへて、戀宿と云り○合歡木花は品物解ふ  
云り。六帖ふのふの題よ此歌を載とるハねぶの花  
音をこれ後ふかふの木と云故なり。ふのハ合歡の  
音なり。○君ハ吾の誤なりと本居氏云り○歌意ハ  
晝ハ見事よさきとれど夜ふなれば獨宿もる吾身の  
人を戀しくのみ思ひて戀倦してうなされ宿る如き  
この合歡木の花を嗚呼さてもいとわしやと吾のみ  
ひとり見てあるべしやはいのでひとりのみ見てハ

あゝむと其方までよ見せむづこめ折てまぬらるる  
あり是を一目見給ひてあもれとたや給へとなる  
べし  
オホトモノヤカモチガコタフルウタフタツ  
大伴家持贈和歌二首

吾君爾戲奴者戀良思給有茅

花乎雖喫彌瘦爾夜須。



吾君爾ハ、吾君と云むが如し、さてかけ歌よ、戯きて  
 和氣といひれたせとる故ふ、又戯きて、此方よりハ、尊  
 とて吾君と云るなり、○戯奴者戀良思ハ、女郎が歌ふ、  
 わけといひおこせとるを受て、其方のわけとのとま  
 ふ我ハ、吾君を戀しく思ふら、と云なり、○茅花乎雖  
 喫ハ、チバナヲハメドとよむべし、○歌意ハ、君の給ハ  
 せふる、茅花を喫とるからハ、肥べき理なるよ、さらな  
 くて、いよくまさりて瘦よ、瘦るハ、吾君を甚く戀し  
 く思ひて、心を悩まに故  
 よてあるらしとなり

吾妹子之。形見乃合歡木者。花  
 耳爾。咲而蓋實爾不成鴨。

不成鴨ハ、未來を疑ひて歎きとる詞なり、自可母とい  
 へるハ、十二三十八丁ふと、田立名付青垣山之隔者、數君乎  
 言不問可聞とあり、○歌意ハ、吾妹子が形見として、ま  
 まとせとる合歡木ハ、のたまふ如く、いづれもいと不  
 しき花のさまよてハあれども、し花のみ咲て、實よな  
 らばてあることもあらむ、さあらむよハ、あゝをさく

六帖よかのみ  
 のうふう花よ  
 のみといへり

ちをしくひあのまづきことなるを嗚呼さてもう  
しろめだきさざ哉と云て吾妹子の言うはしくの  
さまへどもあはれなきくはらふむをのまよあ  
だぬるものよなりて信實の心なくともし止むあせ  
末をいふのぞ

ていふなうむ

大伴家持贈坂上大嬢歌一

首

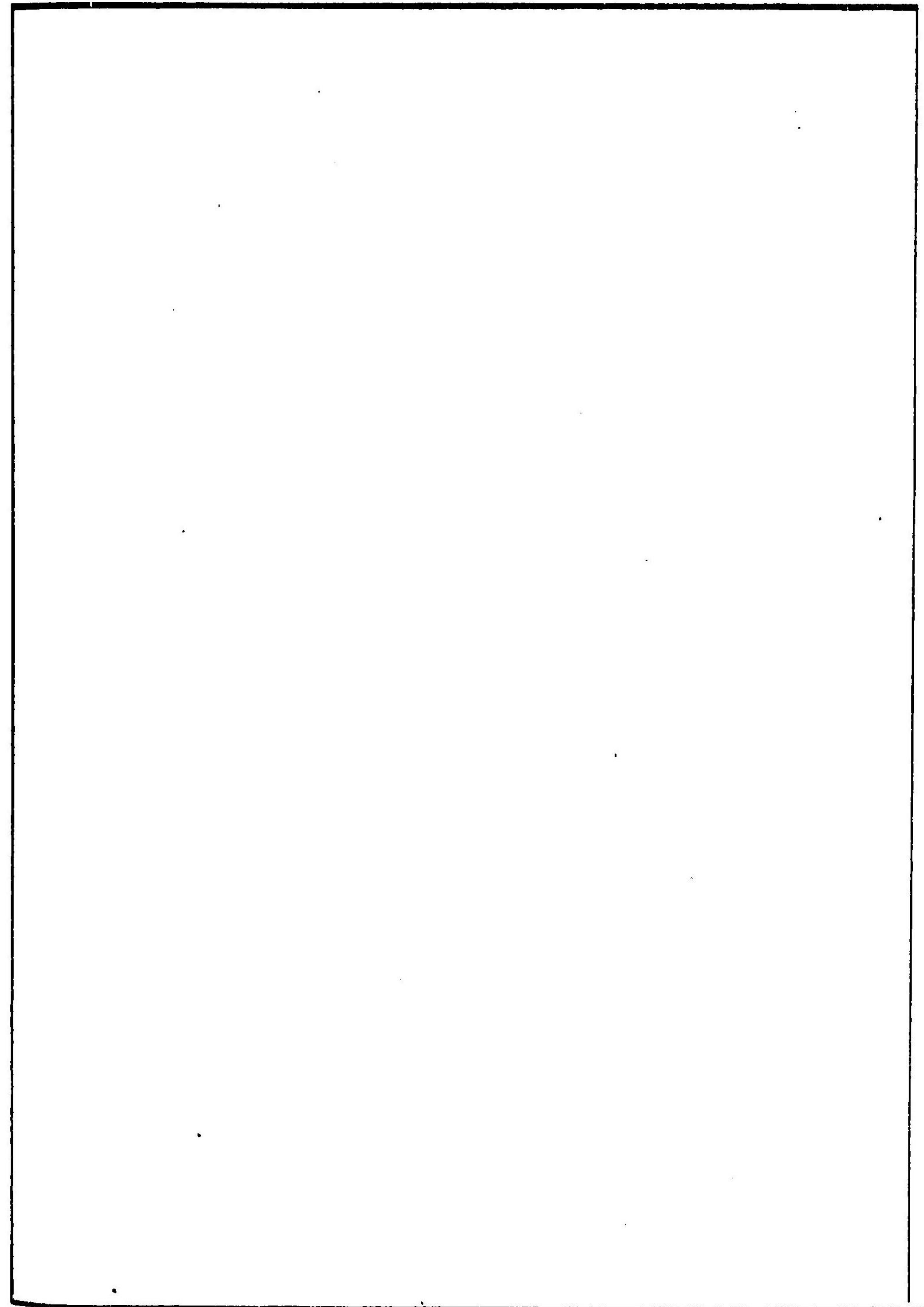
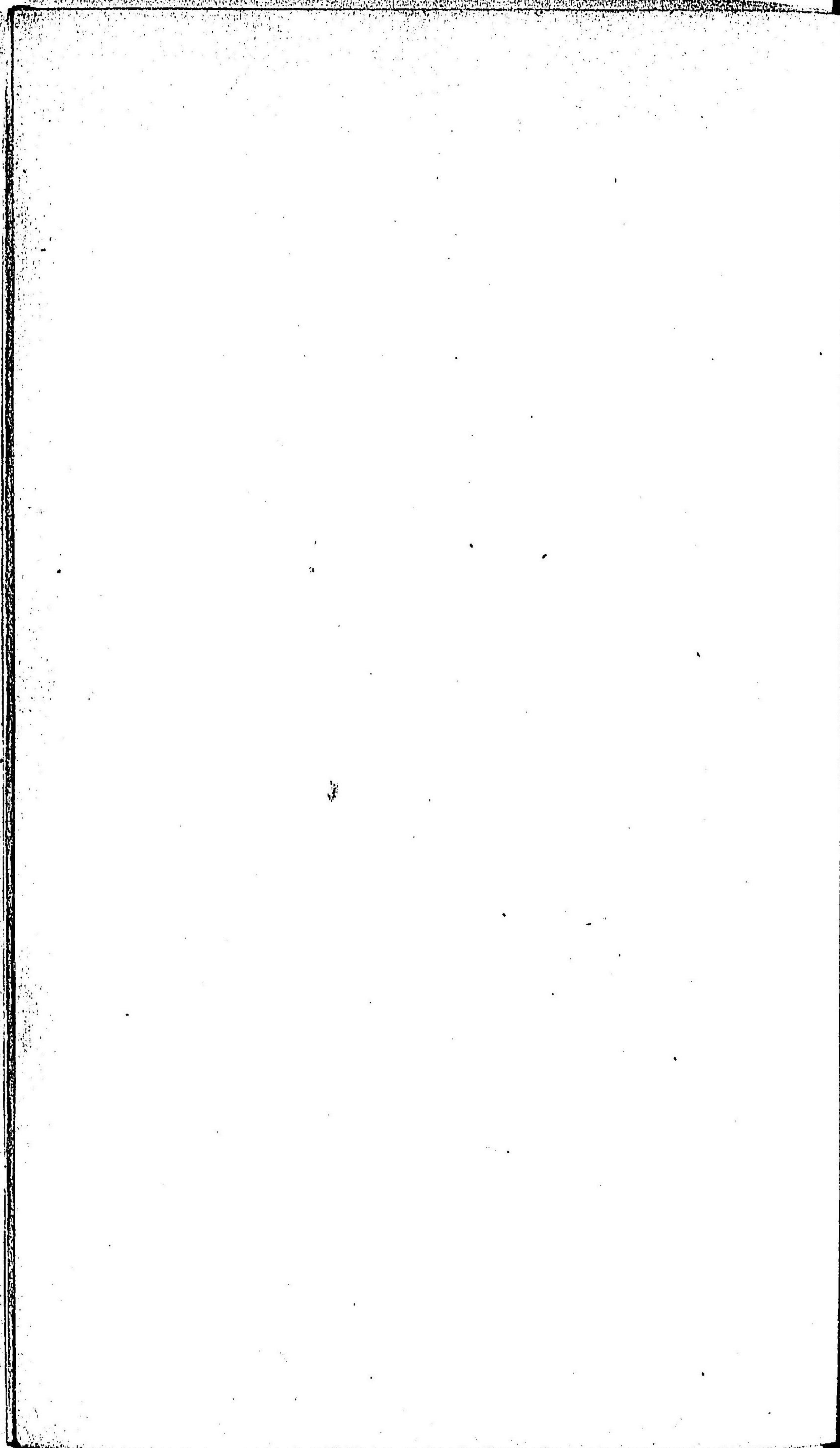
春霞輕引山乃隔者妹爾不相

而月曾經爾來

歌意かくれど

るところなし

右從久邇京  
贈寧樂宅



16  
125  
86

